

年 頭 所 感

大阪大学工学部機械工学科 石 谷 清 幹

現代を転換期と指摘する意見は多いが、どのくらい底の深い転換をとげつつあるものとして現代を見るかという点では多くの意見は必ずしも一致していない。意見の不一致があっても転換は進行するであろうが、意見の不一致による無用のぎせいは絶対に回避したいものである。それには理由のいかんを問わず公認の殺人をいっさい廃止することが必要と思われる。

最大規模の公認殺人はもちろん戦争である。戦争は殺人だから人命以上に価値ありとされるものためにたたかわれることになるが、ともかく理由があれば戦争はしてもよいとされ、たがいに戦争技術を高度に発展させた結果、人類は人類の絶滅に必要な量の何十倍かの武器を常備するにいたった。ベトナムでは核兵器こそ使われなかったがあらゆる新兵器が投入されたという。ベトナムに平和が来ても先進諸国はなんらかの方法でつねに殺人技術の研究開発をつづけるに相異なるまい。しかし、自分の国外へ一度も空襲や艦砲射撃などをしかけたことのない国が、制空権と制海権を完全に握った強大国を相手にまわしてついにまけなかった経験は貴重である。

有史いらい人間がずっと戦争をしつづけてきたことは事実である。つまり、文字による記録の最も初期のものがすでに国王の戦争における栄光を讃美している。しかし、サルが人間になっていらい数百万年の歴史の中で文字に書かれた歴史は7000年以上昔にさかのぼらない。その有史以前の全史において、人類はどうやら戦争をしないで文化をきづいてきたものらしいのである。つまり、戦争の歴史の時間的長さは人間の全史にくらべればつい最近にはじまったことらしいのである。

肉体的にとくにつよくもない人類がたがいの

殺しあいを本能的にやってきたら、数百万年の間生きのびることがまず不可能であったろうと常識的に想像される場所であるが、石器時代の生活をしたまま現代に及んでいる人々の研究や考古学の研究などによって、人類が戦争をはじめたのはすくなくとも農耕の発明による食糧備蓄の発生以後であることが立証されつつあるという。戦争の発生とは殺人の公認であるからこれは価値観の大転換であった。そしていまや人類は戦争の公認をつづければ人類の絶滅に通ずるところまでできてしまった。そのとき価値観の全面的転換と世間でいわれるほどの変化がはじまり、ベトナムで制海権、制空権なく敵の本土へ攻撃などいっぺんもしたこともなくたぶん考えたこともない側が、ともかくも負けなかった。いっぽう、もうひとつの公認の殺人である死刑の廃止もまじめに論じられ、部分的には実行にうつされている事実もある。

私には、人類はついに殺人を公認しない段階にいま入りつつあるのではないかと思えるのである。そして戦後の日本の技術的達成として著名な新幹線と造船が、いずれも殺人技術ではないことにも意味を感じているのである。

革マルの暴力で維持されてきた早大の秩序が非暴力により再建されつつあることにも時代の重味が感じられる。凶暴な学界支配をはかったルイセンコではあったが彼の学説が一敗地にまみれても別に殺されたわけではないらしい。政治的な失脚がただちに死にむすびつくこともどうやらなくなりつつあるらしい。日本国内に交通戦争、公害問題、沖縄問題などの難問をかえつつも、絶対非暴力で暴力を制圧できる可能性がひらけつつあることを年頭にあって確認しよう。甘いとか空想的とかいう批判もあろうが、これが私の心からの年頭所感である。

生産と技術 表紙に見る—25年の変遷



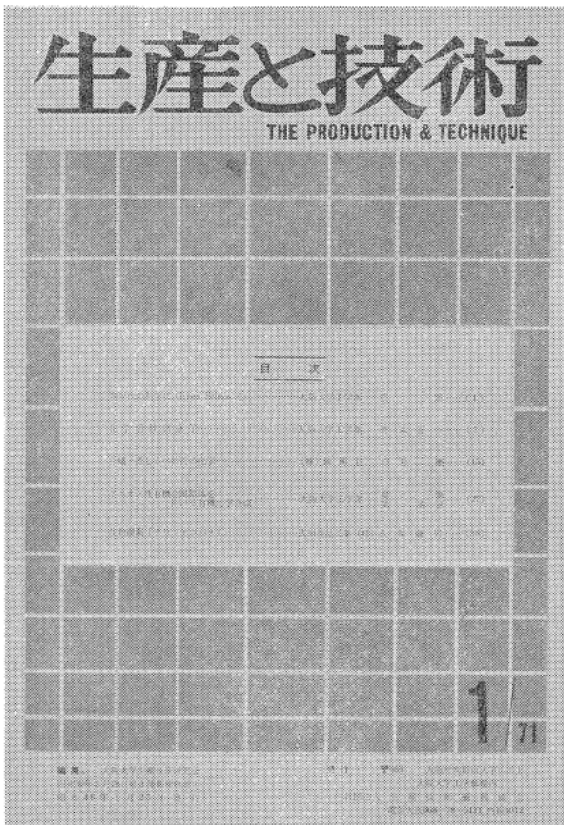
写真1 説明 Vol. 1 No. 1

昭和23年12月17日、当協会設立総会を挙行、翌昭和24年1月25日、創刊号発行、当時の社会事情を物語る紙、インキ等の悪さは却って歴史的でもある。



写真2 説明 Vol. 14 No. 10

昭和36年10月号よりデザイン変更、左肩に生産と技術、赤・黒・白の表紙は爾来9年間使用、またこの頃より表紙に広告を取り入れる。



← 写真3 説明 Vol. 23 No. 1

昭和46年1月号より、それ迄のやや暗いイメージの表紙も刷新、グリーンのさわやかな色に変更、公害が社会問題として取り上げられた当時、この表紙は好評を博した。

そして本号 (Vol. 25 No. 1) より、技術を表わす頭脳と生産を表わす手を合せたデザインに変更、色は毎年変更の予定である。